

# 育ちと教えを統合する世話の現象学

—メルロ＝ポンティにおける知見に着目して—

矢野 泉

## Phenomenology for a lot of care on Integration of Growth and Education :Focusing on Knowledges of Merleau-Ponty

Izumi YANO

### 1. 序章

わたしが本人の育ちを待ちたいのに待つことが容易ではない、たとえば、わたしが待つことのできない教育において、葛藤がしばらくつづくという出来事がある。ここで述べている本人を、不特定多数の教え子たちとする。

ずいぶんと待ったが、それ以上は待てなかった。したがって、待てない、いや待ちの完了すなわち、開けがいつ来るのかわからないままに、待たされるという葛藤から、身体は他者の行為主体性のための器官<sup>1)</sup>となり、身体は軋みつづけた。なぜ、身体が他者の行為主体性のための器官となるのかといえ、人間にしても動物にしても、待つというまなざしは、メルロ＝ポンティが論じたように、「感覚的世界から発して見積もられた、別の感覚作用 (sentir)」（メルロ＝ポンティ, 1969a:21）であり、わたし「以外のものの身体の回路のなかに挿入されているという事実」（同前:同頁）に由来しているからだ。

ただただ、どうしたらよいかわからず1歩も踏み出せない本人のために、本人の代わりに資料を検索し、先行研究を見つけ出し、先行研究がよりどころとしていた理論書について調べ、本の読み方がわからないと真剣に困っている本人に本の読み方を教え、本人の無意識に光を当てて意識化し、問いをたてて、問いから導き出される知見まで示した。それから猛然と、本人は理論書にかじりつくようになった。大変な変化だ。これまでとは目の色が違う。本人の事情で時間が無いのだ。理論書にかじりつき、一次資料を含めて資料を収集し、添削によりかかるのではなく、本人が書かねばならないという意識の濃い時が本人に開示されると、本人に育ちの行為主体性が生成する。しかし、その生成が継続するかについては、本人しか保証することはできない。

しかも、他者の育ちの行為主体性のための器官であるわたしに、本人を代行する行為主体性はない。あるのは、待てない、いや開けがいつ来るのかわからないままに、待たされるという状態において、待ちつづける方へと能動する器官としての身体である。受け入れることを括弧に入れたうえでの待つことを為す。もちろん、わたしは本人に対して、前のめりに期待せず、信頼をおくことしかできない。期待せずに信頼しながら、書けないバージョンの論文指導を工夫しなおした。その結果、本人に明らかな変容が認められた。本人は、論文指導を心待ちにするようになり、かつては宿題をだしても、なにもできずに無言でうつむいていたにもかかわらず、某日の指導日には、論文序章のうちの16行の文章を執筆して、その原稿をわたしにスッと開示したのである。ここで述べた信頼には、無数の先見的な指導行為が含まれる。

したがって、前のめりに期待せず本人を信頼するということは、教えの放棄ではない、という問いを設定し、間身体性の現象学の方法<sup>2)</sup>により、新たな知見を得て、生命の終末期を含む教育学に貢献することを、本研究の目的とする。

## 2. 擬人化された老犬の世話～育ちと教えの統合

前述したとおり、受け入れることを括弧に入れたうえでの待つことを為す。これは、いかえれば、本人が他者から教えられないかのごとくに、本人自身が育ったという感覚を発酵させる半歩降りた世話の現象学である。受け入れることを括弧に入れるというのは、受け入れるでもなく、受け入れるのでもある状態である。行為主体性なき器官として活動するわたしのゆえである。

現象学者である鷺田清一は述べた。(鷺田, 2006:191-192)

「時を育てる。深い傷も、円熟の皺に帰る時というものを」－。ここで私は「育てる」という他動詞ではなく「育つ」という自動詞で、同じことを表記したくなる。時が滑り落ちるのでも、時を先駆けるのでもなく、時が育つ、そう、「育てる」というよりも「ああ育ったあ」という感覚である。このことは子育てや教育においても言えるようにおもう。

よって、育てや教えは、「育てる」というよりも「時が育つ」という感覚であり、すべてに時があり、時が満ちるという状態を指し、本人が育った時間の完了を意味する。わたしは、育ちと教えを統合する概念として世話を措く。「世界とその経験について濃やかに<記述>すること」が「現象学のいわば生命線をなす」(鷺田, 1997:4) のであり、記述が「わたしたちの世界経験の濃やかな襞のすみずみにまでまなざしを挿し込んでいく知的な冒険」(同前) であるならば、わたしもそのような冒険をしてみたい。

この冒険のつれあいは、擬人化された老犬である。この老犬はハルという名が与えられた 2000 年 2 月 7 日生まれの雄のチワワである。

チワワのハルは 2 年前の 5 月、飼い主の知人に 2 時間以上連れ歩かされた。知人と帰宅後、留守番をしていた飼い主によって、下肢のけいれん、起立不全が発見され、動物病院に担ぎ込まれた。関節炎と心不全の初期が疑われ、医師は関節炎の治療を先に、という診断を下した。飼い主が考えるに、その診断はおかしかった。なぜかという、心不全こそが関節炎のような症状を現前させると思量されたためである。電話帳とインターネットで別の動物病院が検索されたが、車のワイパーが左右にふれるように、どの病院へ連れて行くか、つまり、交差点を右へ曲がるか左へ曲がるかが飼い主によって逡巡された。わずか一瞬、検索された病院のアクセスマップが、ハル救済の徴候として、飼い主の脳裏で稲妻のように光った。

むしろ、飼い主が方向を判断するというより、飼い主の指先がその徴候を把持し、その指先に導かれて、検索された病院の待合室に飼い主とハルはいた。診察室に呼ばれて聴診器をあてられ、鼻孔からの水が確認されたハルと飼い主は、「僧坊弁膜症心不全による肺水腫を起こしています。もう手遅れですので、ご自宅で看取って下さい。」と医師に宣告された。「もう手遅れですので」という事態を飼い主は受け入れなかった。なぜなら、飼い主の視線に、ハルの死亡が現前していなかったからである。ハルの生命が完了する時間を先取る時は、未だ到来していなかった。時が至らない。そう飼い主に思量されたのは、飼い主の希いからであろうか。いや、そうではない。ハルの身体、とくに、心臓を覆う組織と皮膚にふれた飼い主の手のひらが指先が、ハルの死という時が至らないことを告げていた。

したがって、飼い主は、医師の背後に空となっていた酸素室があることを根拠として、「先生、その酸素室、空いているじゃありませんか！空いているのなら、せめて呼吸ができるようにして下さい」と押し倒してハルを入院させた。数日後電話でハルの容態が安定したことを聞いた飼い主は、ハルを見舞いに行き、待合室でハルを抱いた。数分機嫌をよくしていたハルが、クジラのように潮を吹き出し、泳ぐような動作をして宙をものがいた。「先生！ハルが呼吸できません！おぼれています！」飼い主の叫びにより、医師たちが駆けつけ、診察室で処置をした。「おぼれる」というのは、心臓僧坊弁の機能不全により、肺

にリンパ液が浸潤して肺呼吸ができなくなること、まさに、ハルは水の中でおぼれていた。飼い主は獣医学の素人であるため、診断および治療の行為主体性をもたないが、放置すれば死に至るという先見を可能にする視線を、身体に備えられた器官として飼い主には与えられていた。

### 3. 時が育つ

果たして、危篤状態が過ぎ越され、治療の甲斐あってハルの容態はもちなおして退院し、その後、幾度か、肺水腫や心肥大による腸管圧迫ガス滞留により、入退院を繰り返して2年が過ぎた。その間、自宅生活における酸素投与と投薬は欠かせなかった。5月のある晩、深夜にハルは激しく吠え続け、翌朝には、気管支炎を併発していた。ハルは胴体を膨らませたり縮めたりして、酸素を取り込もうと頑張り、ゲューとゼーという音が混交する咳を繰り返して、泡状の痰を吐いた。すぐに車で病院にハルを連れて行き、診察室が開くちょうどの時間に、ハルは飼い主と待合室にいた。診察ののち、入院となった。10日が経過した夜、飼い主と担当医との間で電話を介して退院の時期について話し合いがもたれた。獣医は応急措置を終えたので飼い主に引き取らせたい、飼い主もハルを引き取りたいが、退院にあたって障壁があった。

というのは、角度を変えて治療が試されたが、ひどい咳が止まらないのだという。そこで、やむをえず退院の時期をのばした。やむをえずというのも、ハルを抱いた飼い主の服がアンモニア臭まみれになるほど、ハルの身体は尿まみれであったので、そのまま病院に預けておくことが飼い主にはためらわれた。獣医にアンモニア臭の理由を聞くと、ステンレスのすのこ越しではあるが、排泄物の上でハルは寝起きしているから、排泄物によってハルの身体は汚れるのだという。ハルの身体は退院の目途がつけば薬浴によって清潔にしてもらえるため、病院にひきつづき預け、獣医は調剤を工夫し、飼い主はインターネット通販で某病院が取り扱っている「ラッセラ」を探して注文していた。「ラッセラ」は漢方薬で、犬の気管支炎や心不全による咳を改善できる薬効を有していた。犬も個体による多様性があるゆえ、獣医は「ラッセラ」の導入でハルの咳が止まることには疑念を当初もっていた。しかし、ハルの咳には「ラッセラ」の効き目が現れた。気管支炎による入院だったが、担当医はハルの心音を聴診器で聞いて、心不全の特徴である心雑音が複雑化し重篤化していると飼い主に伝えた。ハルはいよいよ僧帽弁膜心不全の最終ステージを迎えたのだ。よって、自宅で投薬する薬もかわった。より効果のある強心剤が加えられ、腸管ガスぬき剤、オレンジ色の液状薬剤、そして、ラッセラを、1日朝晩2回ハルは服用する。効果のある薬剤の与え方については、飼い主がハルの半歩先の容態を先見して変えた。

しかしながら、いかなる病の容態にも波がある。ハルが薬をみのたくない時もある。飼い主がのませ忘れる時もある。ハルは人間の言語をあやつれないが、飼い主の意思に同意することも反意することもでき、鳴いたり身振りをつかって、ハルの意思を飼い主に伝えることができる。なかなか薬をのもうとしない、かくなる時は、飼い主がハルに語りかける。「ハル、いいよ、どっちだって。のみたくないなら、薬やめる？ハルは死んじゃうかもしれないけど、それがハルの意思なら、お母さん、薬のませるのやめるよ」「どうするハル？ハル次第だよ」ハルはお座りして口を開けた。発作が来るまでは、薬の服用で身体は楽になるということを、服用しなかった時の身体の辛さを根拠に、ハルは覚えているのか。そうかということ、飼い主が飲ませたい時をずらして、ハルがこの時に飲ませてほしいという動作をみせることがある。ハルには言葉を話す代わりに動作をする。「言葉は飛び跳ね、無言の意思疎通の波の中に飲み込ま」(メルロ＝ポンティ、1969a:23)れる。言葉と同じように動作は、自他の思考を「当て込んでいるのである。両者は絶えず相手と入れ替わる。お互いに相手の身代わりとなり、刺激するものと」(同前、同頁)なる。

ハルの身体の身代わりとなって、ハルに適した室温管理を行うためにエアコンのスイッチを入れるのは飼い主であり、冷蔵庫から薬を取り出すのも、オレンジ色の液状薬剤の容器のキャップを開けて管のところが

ていない注射器の目盛に合わせて移し替えるのも飼い主である。ハルが水を飲む時も、ご飯を食べる時も、下の世話が求められる時も、あれもこれも、覚えていられないほどの行為の積み重ねがある。しかしながら、こうした積み重ねの行為はいずれも、ハルの「まなざし」に促されているのだ。ハルの「まなざし」に促され、いわば、「ある探査能力」がハルと飼い主との間に「着地し、住みつきにくる」(メルロ＝ポンティ, 1969b:14) のであり、飼い主の「身体を介して存在するのは、単に触るものの、それが触っているものへの一方的な関係だけではない。そこでは関係が逆転し、触られている」(同前:15) ハルが、触るハルになる。飼い主とハルの間では、「触覚が身体のうちに入り込み、身体は『感ずる物』『主体的客体』(subject-object)」(同前:同頁) となっているのである。

ハルは、メルロ＝ポンティがいうところの言活動すなわちパロールを為さない。「仕草とか絵画とかいうような沈黙した表現」(メルロ＝ポンティ, 1969a:124) をハルは担う。ハルの金髪にも似た淡い栗色と白の体毛に覆われた身体は血液が停滞する時間とともに青ざめていく。ハルの身体は飼い主にとってハルから伝えられる「見える身体の諸徴表 (signes) の延長線上にあって点描的に暗示」(メルロ＝ポンティ, 1994:432) される語である。「語は、何ごとかを意義する一種の身体であるが、しかしそれが何ごとかを意義するのは、一つの顕在的な志向がその身体を腑活し、不活性な有聲性の状態 (Körper [身体]) から賦活された身体の状態 (Leib [生身]) へとその身体を移行させる場合に限」(デリダ 1970:154) られる。それゆえ、飼い主は、なにかただならぬ気配を感じてふと横を見る、すると青ざめていく身体つまりハルがいつの間にか飼い主に静かに寄り添って伏して、沈黙の表現とまなざしを以て、飼い主にハルへの投薬や酸素吸入を気づかせる。この時、ハルと飼い主の思考は、「言語を貫いて進むのである。言語は、その振動のなかから取り出されたのではないような思考にはいささかの場も与えることなくわれわれの精神を満たすのだが、まさしくその瞬間に、しかもまさしくわれわれがそれに身を委ねる限りにおいて、それは『記号』をこえて記号の意味へと向」(メルロ＝ポンティ, 1969:64) かうことによって、意思の了解が生成され、意思の伝わり方に関するハルと飼い主の育ちの時が、世話の背後で「開け」ていく。

#### 4. 記憶の忘却

しかも、世話における記憶は、刻まれた時を遮断し、放擲し、忘却する。利尿作用のあるオレンジ色の液状薬剤が出されたのは、気管支炎によるハル入院の時ではなかった。あの時に出された液状薬剤は、ぬめっとして、ハルは口の端から垂れ流すか戻っていた。しかも、この時の事物は咳を止めることが期待された薬剤であった。飼い主は、その薬剤の使用をやめ、ラッセラを積極的に服用させるようにした。

やはり、オレンジ色の液状薬剤が出されるようになったのは、ハルが2年ぶりに肺水腫をおこして入院し、飼い主がハルの退院をひきのばしていた時だった。獣医によれば、二日入院が遅れていたからハルは死んでいたという、いっそう重篤な事件であったゆえ、忘却してはならないが、その記憶のひきずりを遮断し、その記憶の現前を放擲でもしないと、飼い主が出来事の痕跡に足をすくわれる。日常生活が破たんすることを回避するために、能動の器官としての身体がひきよせる、まなざすという行為は、記憶の忘却を生み出す。<sup>3)</sup>

したがって、飼い主は、ハルのことがわからなくなる。ハルをどうしてよいか考えあぐねる。これ以上の入退院の繰り返しは、動物病院やハルへの配慮からやめておこう。いや、このまま苦しんでいるハルを放置して平気なのか、往診を頼んで強心剤や利尿剤の注射をしてもらわなくていいのか、こうしよう、いや、やめておこう、いやいややはりこうしよう、そもそも、飼い主の行為はハルの行為主体性を反映しているのか、ハルの身代わりといいながら、思いつめた挙句の思い込みでしかないのではないか。<sup>4)</sup> このような自己問答は、先に引用した「間身体性は自己を越え出、遂には間身体性としての自己を見失う。それ

は、みずからの出発の状況を移動させ、変形してしまうのであり、構成の原動力は、その終局においても端緒においても見いだされなくなる」(同前, 同頁) 事態の連写である。飼い主の動作はハルの動作と共鳴しているのだろうか。飼い主の一方的な思い込みではあるまい。なぜなら「われわれの身体は、それが生きていて動作となっている限り、この世界に存在しようとする努力によってのみ支えられている」(メルロ＝ポンティ, 1969a:105) ためである。

こうした支えにもかかわらず、なじまれた世界は絶えず覆される。当然、動物病院は来るもの拒まずだろう、あるいは、獣医は獣医学の知識と経験を活用して医療行為だけでなく適切な世話を為すだろうという飼い主の期待が覆されると、飼い主から行為を構成する原動力、記憶の蓄積が忘却される。記憶が忘却される時が来たならば、外部記憶から記憶を更新し、行為を構成する原動力を駆動させる。外部記憶とは、病院ではもう為すことがないと判断されて、心不全の老犬を看取った飼い主たちの経験談を指す。獣医には、診察や調剤、処置や手術などの医療行為、飼い主への請求を為すのであって、動物を世話する主体とは無関係な存在であった。窮屈なケージのなかで生きるハルは、獣医たちにみえてはいてもみられなかった。医療行為としての診るに値せず、世話としてのみるに該当する行為はそもそも、動物病院にはありはしないのだから、みられないというのは疑わずともよい。ゆえに、容態がどうであれ、世話は飼い主の領野である。

## 5. 世話におけるゆだねるという能動

いかなる生命にも終わりがある。飼い主が考えもしないのに、医師から唐突に「安楽死は病院ではやらないから」と告げられて、終末の生命を看取るということは、安楽死という発想が出てくるほど厄介なことなのかと、安楽死という観念がなかった飼い主は、2年前に医師から告げられた、「心不全による肺水腫を起こしています。もう手遅れですので、ご自宅で看取って下さい」という言葉を現前によみがえらせる。「手遅れ」という時の空隙を埋めることはできないのか。手遅れであることがわかっている、せめて育ちの完了に間に合うかもしれないと問わねば、看取りつづけることはできない。

だからこそ、ハルの終末へと向かう容態を「受け入れることを括弧に入れたうえでの待つことを為す」(冒頭) ためには、みることのできない、待たされることの膠着が開けている、という深層の次元に働きかける、まなざすという行為、なくしては語ることはできない。ハルと別れる時が到来しても、それは、閉塞感を伴う一巻の終わりではない。世界各地の先住民の語り伝えに、虹の架け橋の物語がある。人間に飼われて亡くなった動物は、飼い主の前から姿を消すが、飼い主より先にあの世にいて飼い主を待っている。飼い主が亡くなる時、あの世とこの世をつなぐ虹の架け橋が降り来たり、橋をつたってきた動物たちがその橋のたもとで、動物が飼い主を迎えるために待っているという物語である。この物語にどれほどの数の飼い主たちが看取りの閉塞感から解放され、希望を抱いて動物たちの世話、終末への育ちがつづけられたらだろうか。

よって、「脈絡をたどる、あるいはたどりきるのではなく、そうした作業がついに煮詰まってしまう、事態がもう手の施しようがなくなってしまうときに、ふと偶然にまかせる、偶然に身をゆだねることで、新しい局面、つまり新しい脈絡が生まれてしまうということ、そうした僥倖に賭けるということも、事態を忘れることで起こりうる。そうした忘却のわざによって、ひとは現在に陥没するのではなく、現在の〈外〉へのつながりをかろうじて封印」(鷲田, 2006:181) しなければ、いてもたってもいられないという、活動を為すことができない膠着状態から抜けられなくなる。

なぜならば、『期待』ということがなりたないところでこそ、ひとははじめて待つことをはじめる」(同前:183) からである。「待つもしかたがないとじぶんに言い聞かせ、待つことを放棄するなかではじめて、

待つということのほんとうの可能性が到来」する（同前、同頁）のではないか。いかような到来であっても、たとえば、育ったという時間の「到来を待つ」といふこととは、結局、待つことそのことを放棄したところからしか始まらない。待つことを放棄することがそれでも待つことにつながるのは、そこに未知の事態へのなんらかの開けがある」（同前:185）ためではないか。

この傍点をふって「開け」を強調したのは鷺田だ。というのも、「開け」に「待つということ」の現象学的知見が凝縮されているのである。擬人化されたハルの世話における「開け」とはなにか。「開け」への営みは、ただ、ハルの終末への育ちを見守るという受動ではない。みえないことをみる眼が、聴かないノイズを聴く耳が鍛えられ育って、ようやく、何か他のことをしていても、皮膚と組織を貫いたハルの心臓の動きと心不全末期特有の心雑音が聴診器をあてなくとも聴こえるようになる。ザーザーザーという激しいノイズが飼い主の仕事の手を止める。ハルは飼い主が腹を痛めて産んだ子同然であるから、ハルの痛みを飼い主の腹に戻して、あと一時、もう一時と、有限でありながら無限の営みを繰り返すことで、育ったという時の完了まで、前のめりになりがちな行為主体性を消し、行為主体性なき器官としての身体を「開け」にゆだねるのである。

## 6. 終章

このように、ゆだねるという能動は、「未完の運動であり、世界を開く試み（エッセー）」（鷺田、1997:8）である。「みえてはいるが『誰れもみていないものをみえるようにする』」の「<現象学>」（同前、同頁）である。本稿における論点すなわち、「ふだんみえているのに、みえないものを、みえるようにする」ということを、形而下における日常的行為を反省的に参照し、「脇の下の体毛処理」なる論理を述べる。脇の下に体毛が生えた場合、剃るか抜くという習慣が、思春期個体の美的感覚を圍繞する<sup>5)</sup>とすれば、第一に、「脇の下の体毛処理はするものだ」という常識が見識のなかに埋め込まれている、第二に、「脇の下の体毛はまだ生えてきていない、つまり、脇の下の体毛は、未だみえない」、にもかかわらず、第三に、「いずれ、生えるということは先見されているため」、体毛が育っていない脇の下の皮膚を剃る、のである。つまり、「先見して動く」という営みが、みえてはいるが誰れもみていないものをみえるようにするのである。

わたしは、まなざすという行為すなわち「見開き」にノイズを聴く「聴聞」という知見を加えたい。沈黙を含めた「声の現象学」については、フッサールの著作のうち『間主観性の現象学 その方法』（2012）、メルロ＝ポンティの著作（『Signes』1960）から訳書『シーニュ1』（1969a）、『シーニュ2』（1969b）、『知覚の現象学』（1982）、『見えるものと見えざるもの』（1994）、デリダの『声と現象～フッサール現象学における記号の問題への序論』（2012）をはじめとする諸研究、かれらの研究をレビューした先行研究がある。しかし、フッサールやメルロ＝ポンティ、デリダにおける研究、および彼らのフォロワーたちの先行研究では、楽器の音声や沈黙を含む声としてのボイスが注目されているのではないか。そうではなく、わたしは、動物の心臓や呼吸の音、水を飲む音の反復、あるいは屋根をたたく雨水（矢野泉、2010:115）のノイズに着目し、耳をよほど澄まさない限り聴かれない、「聴聞」であることを示す。

よって、序章で設定した問いに、つぎのように応えたい。本人を、前のめりに期待せずに信頼し、見えているのに誰れも見えないようなものをまなざす姿勢「見開き」を生成させ、聞こえているのに誰れも聴かないノイズを聴き問う構えを、わたしたちの間に生成させる。したがって、見えない聴かないという、閉ざされた世界を「開け」、「未完の待ち受け」を為すということは、教えの放棄ではなく、現象学に基礎づけられた、教育の更新に布置する、育ちと教えを統合する世話である。

かかる世話（care）は、エリクソンの理論によれば、成人期に顕著に見いだされるが、誕生から老年期にも引き継がれる "human strength or ego qualities"（Erikson:58）である。エリクソンの理論は、現象学的命

題 (phenomenological proposition,) から、とくに、精神分析や心理学の命題 (psychoanalytic-psychological proposition) まで、系統的に区別されないまま、広範囲に及ぶ<sup>6)</sup>。以上のように、本稿における問いを、世話の現象学として示すことは、教育学研究における新たな知の問題系を為すだろう。

#### 注

- 1) 事物が知覚される時、身体を間接的に介する。事物の知覚を感受する時、本人の身体は、他者として認識された他人の行為主体性まで所持することはできない。他者との間で意思疎通を行うのであれば、身体は人間であれ動物であれ、感受するための器官に変成される。
- 2) フッサールは『間主観性の現象学その方法』においてこう記した。(フッサール, 2012:149) 「(一) 私たちが認識する依存関係や機能的連関は、物理的な自然だけに関係しているのではなく心理物理的な自然にも関係しており、私たちが認識する機能的連関とは、一方の物理的な事物、ここでは身体およびその物理的な出来事と、他方の意識との間の連関なのであり、そしてこのことはどの人間にも、またどの動物にも当てはまる。(二) 他方で私たちは、意識それ自身の内にある連関を『動機づけ』として、つまり、知覚、判断、感情、意欲などの間の連関として追究することができ、これらすべてをしかじかの『内容』をもった体験として追究することができる。私たちは、自分が想起に基づいて確信している特有の体験について語るることができるし、感情移入に基づいて他人に帰属させる体験についても語るることができる。そして後者の場合、私たちは経験的な身体を知覚し、あるいはそれを表象し思考しつつ措定しており、そしてこうした措定に基づいて、私たちが『内的に』知覚したのではないものをその[他人の]身体の内、他者の意識、他者の心理的な体験という名称のもとに『置き入れる』ための動機を見いだす。私たちは相互交流においてこうしたことを行っている」この「経験的な身体を知覚し、あるいはそれを表象し思考しつつ措定し」ていることは、わたしが日常的に為している。フッサールはまた、「誰もが、自分の自我体験や一般に自分の特殊な自我所有をも、身体へと関係づける。こうして人はそれらを身体に局在化するのであり、ときには直接的な『経験』、無媒介的な『直観』に基づいて、ときには間接的に経験にそくしたり類比化したりして知るという仕方でも局在化する」(同前:21)と記し、「おのおのの自我は自分の範囲に、またしばしば自分の顕在的な範囲のうちに、次のような事物を見いだす。すなわち、それを身体とみなしはするが、『自分固有の』身体とはっきり区別される、他の身体とみなすような事物である。」(同前:22)自我にとって身体は自我主観の担い手である。自我以外のつまり他の自我を『見る』わけではない。自我はそれらを『感情移入』という仕方でも措定し、それゆえ、他の経験や性格素質もまた『そこに見出される』ようになる。だがそれらは、自分固有のものと同じ意味で与えられ、所持されるわけではない」(同前, 同頁)と述べた。肝腎なのは、「おのおのの自我は自分の範囲に、またしばしば自分の顕在的な範囲のうちに」見ないものを見えるようにする、「見開き」の生成である。
- 3) まなざすという行為を鷺田清一は「まなざしの運動」(鷺田, 1997:7)と名付けた。まなざすという行為は、「私が自分を捉えようと試みる時～(中略)～あの『距離を置いた視覚』のなかにひそんでいるのだ」(『シーニュ』:20-21)というコンテクストにおいて詳述されている。『Signes』は、『シーニュ1』『シーニュ2』の2巻に分けて翻訳された大著で12を超えるエッセイからなる論文集である。解説の最後に、論文集がなぜ"Signes"と題されたか、ポンティが記さなかった題目命名の謎解きが試みられている。
- 4) 先見性と思い込みの相違を、本文では詳述していない。これらの相違は極めて深刻な論点を包摂している。飼い主にとってわが子同然の動物に関する判断は、飼い主にとっては、「ああ、やっぱり、だめだといわれても、持ち直した」という場合でも、医療行為を行う獣医師にとっては、根拠のない飼い主の勝手な思い込みとして、飼い主の先見に関心を抱かないか、獣医師を焦れさせる面倒な思い込みとして軽視したり、飼い主の判断を疎ましく遠ざける場合がある。飼い主の先見を放擲する獣医師の殺し文

句として、「うちではできません。うちの病院ではみられないので、飼い主様のごじぶんで看取って下さい」などがある。このような関係性の遮断は、動物病院の場合でみられるが、人間の医療にも同様の所見がある。医師のいうことにおとなしくしたがわかない、先回りして医師に細かく質問したがる、医師と適度な距離感を保てない、などの患者は管理不能な厄介な外部として、「紹介状を書きましょう。ほかの病院へ行ってください」という殺し文句が効用される。こうした、医療者と患者の関係性を、医療文化人類学、現象学など、折衷主義的な研究方法を採用して、研究領域横断的に知見を提供しつづけている中井久夫がいる。

- 5) 思春期になると、たいがい脇の下に体毛が伸びる。たとえば、脇の下がみえる半袖の夏制服を着用していたり、水泳の授業で水着をきて泳ぐようになると、クラスメイトからの厳しい視線に気づかされたり、「剃らないとみっもないよ」という親切な忠告により、体毛処理は思春期から成人期にかけての常識なのだと、縛りをみずからにかけける。体質によって体毛処理の必要のない場合もある。また、ある時期まで時が育つと、体毛はしぜんと生えなくなるという個体もある。現代では、人権保護の見地から、セクシャルハラスメント防止の啓発活動や、性の指向性については、性別問わず個体の判断を優先するという社会的状況にあるため、筆者は、本稿において、思春期個体と表現した。
- 6) "human strength or ego qualities" は、エリクソン晩年の著作、"Vital Involvement in Old Age: The Experience of Old Age our Time." (W.W.Norton&Company,1986) では、むしろ virtue として論じられている。この著作は、Erikson,J.M. 並びに Kivnick,H.Q. との共著であり、みずず書房から、朝長正徳・朝長梨枝子が翻訳し、『老年期～生き生きしたかわりあい』として1990年に出版された。原著の Vital は、名詞 virtue の形容詞である。virtue はエリクソンの著作の邦訳者たちによって、1977年みずず書房から刊行された『幼児期と社会』I II から、「徳」あるいは「徳目」、原意から外れる「課題」と訳書で記されているが、virtue の原語ラテン語 virtus は、勇気を象徴するローマ神ウィルトゥスを指していた。ウィルトゥスの特徴である勇気や活力が転じて、「徳」「徳目」といわれるようになったのである。「徳目」が「課題」と同意と解釈されるに至っては、もはや、勇気を象徴する語の片鱗すらみいだせない。"human strength or ego qualities" はラテン語 virtus の語意を表象するエリクソンの語用であり、virtue もまた然り、「世話」は目指される「徳」ではなく、「育ち」がもたらす勇気や活力である。"human strength or ego qualities" と "virtue" に関する知見は、平成4年1月6日東京大学大学院教育学研究科教育行政学専攻社会教育学専修（専攻名は当時の名称）に修士学位論文として提出され受理された未公開論文、矢野泉『高齢者の学習に関する分析方法についての研究』(:1-132)における考察を発展させたものである。

## 参考文献

- エリザベート・ド・フォントネ \* 石田和男・小幡谷友二・早川文敏 (2008) 『動物たちの沈黙』, < Elisabeth de Fontenay, "Le Sinc des Bêtes", (1998), Librairie Artème Fayard. > 彩水社 :1-779.
- Erik H.Erikson., (1982), "The Life Cycle Completed", W.W.Norton&Company:1-108., < E.H.Erikson (1989) \* 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル, その完結』みずず書房 :1-157 > .
- エドムント・フッサール \* 浜鍋辰二・山口次郎監訳 (2012) 『間主観性の現象学その方法』筑摩書房, < Edmund Husserl, "Zur Phänomenologie der Intersubjektivität.", Twxte aus dem Nachlass, Erstel:1905-1920., Husserliana Band XIII:Zweiter Teil:1921-1928., Husserliana Band X IV :Dritter Teil:1929-1935., Husserliana Band X V ., hrsg., von Iso Kern, Den Band Nijhoff., 1973 > :1-552.
- Donald A.Landes, "The Merleau-Ponty Dictionary", (2013), Bloomsbury Publishing Pic:1-269.
- ジャック・デリダ \* 高橋昭充 (1970) 『声と現象－フッサール現象学における記号の問題への序論』理



- 想社, < "Jacques Derrida, (1967), "La voix et le Phénomène du Signe:dans la phénoménologie de Husserl", Presses Universitaires de France > :1-236.
- 藤本一勇 (2008) 「メルロ＝ポンティとデリダ」『現代思想』2008.12月臨時増刊<特集:メルロ＝ポンティ～身体論の深化と拡張>, 青土社, 第36巻第16号:276-287.
- 廣瀬浩司 (2008) 「野生の世界の風景と出来事の暴力－メルロ＝ポンティ『受動性の問題』についての講義から－」『思想』<メルロ＝ポンティ生誕100年>岩波書店, No.1015, 11月号:8-27.
- 廣瀬浩司 (2010) 「諸文化を横断する戦闘的な真理－メルロ＝ポンティ『制度化』概念と『間文化現象学』」『現代思想』<特集:現象学の最前線－間文化性という視座>, 青土社, 第38巻第7号:186-197.
- 加國尚志 (2008) 「沈黙の詩法－メルロ＝ポンティにおける『沈黙』のモチーフ－」『思想』<メルロ＝ポンティ生誕100年>, 岩波書店, No.1015, 11月号:28-54.
- 中井久夫 (2004) 『徴候・記憶・外傷』みすず書房:1-403.
- 中田基昭 (2008) 「身体的感受性についてメルロ＝ポンティから学ぶ」中田基昭『感受性を育む－現象学的教育学への誘い』東京大学出版会:129-167.
- M.メルロ＝ポンティ \* 中島盛夫訳 (1982) 『知覚の現象学』, < Merleau-Ponty, M. (1945) "Phénoménologie de la perception", Paris, Gallimard. > 法政大学出版局:1-862.
- M.メルロ＝ポンティ \* 竹内芳郎監訳 (1969a) 『シーニュ1』, < Maurice Merleau-Ponty, (1960) "Signes", Éditions Gallimard > みすず書房:1-277.
- M.メルロ＝ポンティ \* 竹内芳郎監訳 (1969b) 『シーニュ2』, < Maurice Merleau-Ponty, (1960) "Signes", Éditions Gallimard > みすず書房:1-340.
- モーリス・メルロ＝ポンティ \* クロード・ルフォール編 \* 中島盛夫監訳 (1994) 『見えるものと見えざるもの』法政大学出版局:1-583. < Maurice Merleau-Ponty, (1964), "Le Visible et L'invisible", Éditions Gallimard. >
- モーリス・メルロ＝ポンティ \* 中山元編訳 (1999) 『メルロ＝ポンティコレクション』筑摩書房:1-305.
- モーリス・ステファニー・メナセ編纂・モーリス・メルロ＝ポンティ著 \* 菅野盾樹訳 (2011) 『知覚の哲学ラジオ講演1948年』< "Maurice MERLEAU-PONTY:CAUSERIES 1948", (2002), "Ponty Causeries 1948", Textes établies et annoté par Stéphanie Ménasé, Paris Éditions du Seuil > 筑摩書房:1-423.
- 村上靖彦 (2013) 「親愛なる……に－現象学の方法についての書簡」『現代思想』<特集:現代思想の総展望2013>, 青土社, 第41巻第1号:64-67.
- 西岡けいこ (2008) 「脱自あるいは教育のオプティミズム－ソルボンヌ講義を起点とする肉の存在論の教育思想的意義」『現代思想』<総特集:メルロ＝ポンティ身体論の深化と拡張>, 青土社, 第36巻第16号:347-357.
- 奥井遼 (2012) 『『沈黙の声』にみる身体的志向性－わざ研究へのメルロ＝ポンティ現象学からの接近－』京都大学大学院教育学研究科紀要, 第58号:183-191.
- 齋藤孝 (1999) 「身体知としての教養」日本教育学会『教育学研究』第60巻第3号:29-36.
- 立松弘孝編, エトムント・フッサール著 (2009) 『フッサール・セレクション』平凡社:1-319.
- 矢野泉 (2010) 「ライフストーリー・インタビュー作品化の協働は可能か:在日朝鮮人教育に向かう『バネ』の解明」研究代表者 \* 中島智子『異文化間教育研究におけるインタビュー手法の相互性構築過程と作品化の研究』平成19年度～21年度科学研究費補助金(基盤研究C課題番号:19530769)研究成果報告書:96-118.
- 鷺田清一 (1997) 『現象学の視線－分散する理性』講談社:1-198.
- 鷺田清一 (2006) 『「待つ」ということ』角川書店:1-335.